

社会社会言語科学会 20 年の軌跡とこれから

— 徳川賞受賞者からの提言 —

シンポジウム企画者 小磯花絵 (国立国語研究所) 田中ゆかり (日本大学)

1. はじめに

1998 年に発足した社会言語科学会は、今年 20 周年を迎える。言語・コミュニケーションを人間・社会・文化との関わりにおいてとりあげることを、そのためにトランスディシプリナリーな研究の場を創り出すこと、これが学会創設時の目標・理念であった。20 周年記念シンポジウムを企画するにあたり、これまでの学会誌の特集や研究大会のシンポジウムのテーマを一通り見てみたが、実に多様なテーマ、また多様な方法論を扱っており、創設時に掲げた目標・理念が、本学会の根幹を成し、着実に受け継がれていることを改めて確認することができた。この印象は、企画者だけでなく、多くの学会員も抱いているものではないだろうか。

本学会が目指した方向性はこれだけではない。徳川初代会長は本学会設立に際し、「この学会では特に若い研究者の活躍に期待するところが大きいと考えています。(略)この学会の運営については、各会員の自由な発想が基盤になるよう、考えていきたいと思っております」と述べている¹。例えば若い研究者の意見を学会運営に積極的に取り入れるため、企画委員会が主導し、2003 年から研究大会期間中に「未来を作る会」が開催されるようになった。若い研究者を中心とする学会員と理事が学会について語り合い、そこで出された意見や要望は理事会で報告され、学会運営に反映された意見や要望も多かった。現在では学会員の意見をより広く集めるため Web 窓口も設置され²、未来を作る会や Web 窓口で受けた意見・要望に対する対応状況もホームページで公開されている³。

このように、若い研究者に機会を与え、また自由な発想を基盤に学会を運営する、こうした姿勢が、トランスディシプリナリーな研究の場を創り上げる土台となったと言えるだろう。

そこで 20 周年記念シンポジウムでは、本学会が若い研究者に多くの機会を与えてきたことに改めて焦点を当て、学会の将来の方向性について学会員とともに話し合う機会にしたいと考えている。

2. 徳川受賞者からの提言

具体的な企画を練る過程で、本学会の「顔」のひとつである徳川宗賢賞に着目した。この賞は、学会誌『社会言語科学』に掲載された論文の中から、とくに優れた論文に授与されるもので、2000 年度に設立されて以降、萌芽賞を含めて 31 件の受賞があった。これまでの受賞者の中には、若手の研究者も多く、また受賞理由を見ても、必ずしも「完成」された研究だけでなく、挑戦的な研究や今後の進展が期待される研究なども多く受賞している。

そこで、若手を中心とした受賞研究の概説ならびにその後の展開や本学会への期待などを語っていただくこととした。時間が限られることから、若手を中心とした受賞研究のうち、挑戦的な研究、今後の進展が期待される研究を中心に、分野のバランスに企画者の「趣味」を加味し、中東靖恵氏、山下里香氏、坊農真弓氏の 3 氏に登壇していただくことになった。受賞論文は次の通りである。

第 5 回 徳川宗賢賞受賞論文(2005 年度)萌芽賞

坊農真弓・片桐恭弘「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点—ジェスチャー・視線・発話の協調—」

第 11 回 徳川宗賢賞受賞論文(2011 年度)優秀賞

中東靖恵「パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容—パラグアイの広島県家族を対象に—」

第 11 回 徳川宗賢賞受賞論文(2011 年度)萌芽賞

坊農真弓「手話会話に対するマルチモーダル分析—手話三人会話の二つの事例分析から—」

第 15 回 徳川宗賢賞受賞論文(2015 年度)萌芽賞

山下里香「モスク教室における在日パキスタン人児童のコードスイッチング」

先に述べた趣旨に従い、3 氏には以下の順と題目にて登壇をしていただく。これを通じ、本学会がどのような学会であり、何を目指して行くのかを、学会員とともに探求するきっかけとしたい。

- ① 中東靖恵「言語研究者としての社会への貢献—学問の継承・展開と新たな発展—」
- ② 山下里香「「多言語使用」から「境界」の言語学へ：「国際」と「国内」のはざままで」
- ③ 坊農真弓「身体に刻みこまれた二つのことばの記憶—手話・触手話・指文字からみた日本語—」

¹ http://www.jass.ne.jp/?page_id=19

² http://www.jass.ne.jp/another/?page_id=329

³ http://www.jass.ne.jp/another/?page_id=335